

【研究ノート】

嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解 (一)

黄色 瑞 華

凡例

- 一 本稿は、嘉永版『俳諧一茶発句集』(所収句八二二、他に俳諧歌一八)の全注解である。
- 一 行めに『一茶発句集』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行文字とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に( )に入れて注した。
- 一 二行め以下に、⊕として、初出及び他書に所収の有無を書名によって記した。
- 一 句形等に嘉永版『一茶発句集』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 一 語注は、簡略を旨とし、必要最小限にとどめた。
- 一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。
- 一 注釈史上看過しがたい諸注は、▼以下に記した。ただし、その著者及び書名は、初出においてのみフルネームを記し、以下は「勝峰『名句評釈』」のように略記した。詳しくは稿末の「参考文献」を参照されたい。

## 一茶発句集

## 春の部

元日や上々きちの浅黄空

㊤ 浅黄空・自筆句集・俳諧寺抄録・希杖本句集・真蹟(文政8・1)

▽ 浅黄空・俳諧寺抄録、前書「元日」。嘉永版発句集以外、中七「上々吉の」。我春集・稿本発句題叢、「我春も上々吉ぞ梅の花」。我春集には「着到帳第一番」の前書あり。七番日記(文化8・1)、「我春も上々吉よ梅の花」。同(11・春)、「我春も上々吉よけさの空」。

語注 「上々吉」、最上、の意。芸事の位付で、この上もないできばえをいう。もと、歌舞伎評判記の「位付」から出た評語。ただし、評判記では、この語の上に「真」「功」「極」などの文字を冠すこともある。「浅黄空」、薄い藍色の空、の意。「浅黄」は、普通「浅葱」と書く。

解 浅黄色に晴れあがった天空に、初日が輝いている。その元日の空を仰ぎ上機嫌で新年を祝う、そういう気分を詠んだ。

我春集の「我春も上々吉ぞ梅の花」が初案であろう。文化七年十二月二十三日、起死回生の願いをこめ、守谷を拠点に下総一帯の俳士たちの鳩合を図って、西林寺に入った。前書の「着到帳第一番」(我春集)には、序文に記した意気込みが感じられる。俳人真蹟全集に収めてある真蹟では、文政八年正月、中野の山岸梅塵宅での歳旦吟になっている。この時の改作であろう。

▼ 荻原井泉水『一茶春秋』(目黒書店、昭13)に、「浅黄色の空に『上々吉』を感じたところに一茶らしい見方がある。どうも毎年、不運がつづいたが、今年こそは好い年廻りらしいぞと微笑まれる、一茶らしい感じも出てゐる」。丸山一彦『小林一茶』(桜楓社、昭39)に、「この句では、元日の晴天を喜ぶ気持を率直に叙しているため、これらの語(注、「上々吉」「浅黄空」)もいきいきと働いて、変な誇張や嫌味から救われている。句調にも弾みがあって、新春にふさわしい爽快なリズムが感じられる」。

元日も立のまんまの屑家かな

㊤ 浅黄空・自筆句集・俳諧寺抄録・希杖本句集

▽ 八番日記(文政4・10)・発句鈔追加、中七「立のまゝなる」。

語注 「立のまんま」、昨日と変わらない、の意。建ったまま。八番日記には、中七「別条のなき」としたものが併記されている。

解 元日といっても、我が家は昨日と変わらないぼろ家のままである。

おらが春に、「おのれら(注、親鸞教徒)ハ、俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴亀にたぐへての祝尽しも、厄払ひの口上めきてそらくしく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑家ハ、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける」。とある。「門松立てず煤はかず」(親鸞教徒は「門松」を立てない)に、ありのままで迎えた新年、の意と解すべきであろう。

▼ 勝峰晋風『一茶名句評釈』(非凡閣、昭10)に、『別条のなき』は平凡だが、『立のまんま』には旧態依然という自分自身への感慨が遙に強く出て来る。

春立と申すもいかゞ上野山

㊤ 七番日記(文化7・1)

語注 続虚栗に、「花の雲鐘は上野か浅草敷か(芭蕉)」。おくのほそ道に、「上野・谷中の花の梢、又いつかはと心細し」。これが念頭にあったのだろう。

解 立春というが、今年はまだ上野山の桜も咲いていない。これで春というのは、いかがなものか。

▼ 荻原井泉水「一茶篇」(国民の文学『芭蕉名句集』所収・昭39)に、「一茶が伝統をついだ葛飾派の馬光の句に、『松杉の上野を出れば寒さかな』という句がある。一茶時代から、上野の山というものは、どっちから見てもさむざむとした存在だったと見える。新年、春立つといえれば何もかも春めいてきそうなものだが、上野の山はさっぱり春らしい趣はない。『これで春が立ったというのもどんなものかしら』という意味。『一茶の俳句というものは、他の俳人の句と違った特色をもつも

のだが、その特色はどういう点が一番著しいかというのに——それは季題の趣味というものを主としないで、自分の着想を書くというところである」。

土蔵から筋違にさすはつ日かな

㊤ 八番日記(文政2・1)

▽ 風間本八番日記、中七「すじかいにさす」。浅黄空、上五・中七「よ所の蔵からすじかひに」。

語注 「筋違」、ななめ。筋交い。蕪村に「ほととぎす平安城を——に」(句稿屏風他)。

解 下々の家には、大家の土蔵をかすめるようにして、「筋違いに」初日がさしているよ。

▼ 川島つゆ「一茶集」(古典文学大系『蕪村集一茶集』所収、昭34)に、「一茶の特殊な観照のレンズの向け方。土蔵のかげになって日当りのわるい裏住居を思わせる」。

鶯のいな啼やうも今朝の春

㊤ 八番日記(文政2・12)

▽ 八番日記、中七「いな啼やうも」。

語注 「いな啼(く)」、本来は「馬が声高く鳴く」の意。嘶。和名抄に、「嘶 玉篇云嘶『音西。訓以波由。俗云以奈々久』馬鳴也」とある。「鶯のいな啼(く)」は、一茶の俳言。

解 鶯のいななくような高音に、春の訪れを強く感じた、と解す。

あばら家の其身其まゝ明の春

㊤ 八番日記(文政2・12)

▽ 八番日記、上五「あばら家や」。「元日も立のまんまの眉家かな」(前出)と同趣。

## 還 曆

春立や愚のうへにまた愚にかへる

㊤ 文政句帳(文政6・1)・文政版発句集

▽ 文政句帳、「菌原や、そのはらならぬはゝきに、住馴し伏家を掃き出されしは、十四の年にこそありしが(中略)今迄にともかくも成るべき身を、ふしぎにことし六十一の春を迎へるとは、実にく盲亀の浮木に逢へるよろこびにまさりなん。されば無能無才も、なかく齡を延る薬になんありける。」の文にこの句を添える。

文政句帳(5・9)、中七「もとの愚が又」。自筆句集、中七「愚の上を又」。

語注 この場合の「愚」は、「うき節茂きうき世ニ生れたる娘、おろかにしてもものニさとかれ迎、名をさとよぶ」(おらが春、第十二話)の、「おろか」と解すべきである。「愚」、つまり「凡愚」は、世渡りについていう語と解す。

解 凡愚は生来。還曆といつても、その凡愚の上に凡愚を重ねるのだけだ。凡愚は凡愚のまま生を全うしよう、の意。株番で、「よし／＼汝はなんぢをせよ、我はもとの株番」と、ひらき直った一茶は、十年後再びそれを確認したのである。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「干支を一巡して元に返る、そこに『かへる』が働いて居り、本卦返りには又童幼の昔に返るともされて赤い着物で祝うたりする。本来愚なる上に、今更に——『愚に返る』といふ成語を以てして此の句をして抜き差しし出来ぬ緊密なものとしてゐる。無論これは一茶の自嘲であり、又徹底した大悟でもある」。中島斌雄「小林一茶集」(古典日本文学全集、与謝蕪村集・小林一茶集所収、昭35)に、「今年六十一歳の還曆を迎えたが、生来愚かな人間が再び生まれた年の干支に還るのであるから、いっそう愚人としての本性に徹して、その生を完うしたいものである。(中略)一茶は自分の本性を見きわめたうえ、見栄も外聞も捨てて凡庸に徹した」。

## 新家賀

年立や雨おちの石凹むまで

㊤ 文政句帳(文政5・9)・浅黄空・俳諧寺抄録・自筆句集・文政版発句集

語注 「年立や」、「新年」の意に「幾年月経過」の意を掛ける。  
解 幾星霜を経て、「雨落の石」がへこむまで、この家の弥栄を祈念する、の意。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「『雨おちの石凹むまで』はちやうど、さゞれ石の巖となりて苔のむすまでと相似た発想法で、新家に対して石の凹むと言ったのはさすが一茶である。栄ゆくとか、茂りゆくといふ様な語がとかく祝句には持ちまはされる。『年立や』は新年を示したゞけのものとしてはこの句には浮泛の感じを与へるが、一茶の心の中には、幾百年も今日から立つといふ思想を織込ましてあるのであろう。両義を兼ねるの可否は別として、かく解して初めてこの句も生きるであらう」。

あら玉の年立かへるしらみかな

㊤ 文化句帳(文化5・1)・自筆句集・一茶発句鈔追加・近世発句類題集

語注 「しらみ」(虱)、新年の句であるから「しらみ」は、昨夏来着物に巣くう「しらみ」(の卵)である。

解 新年といっても、とり立てていうほどの変化はない。しかも、着のみ着のまま。新春をことほぐべきは、昨夏来私の着物に巣くっている「しらみ」のほうだ。

▼ 黒沢隆信『一茶俳句研究』(大洋社、昭8)に、「作者たる一茶自身を露骨に現はした——それを覗ふに適当な句と思ひます。新年が又来たか——己れは美服をつけるのでもない、去年着たまゝの垢のついてゐる破れ衣、それには虱はいっぱい巣喰つて居る。自分に新年の立かへるのでなく虱に新年が来たのぢや、我が新年は如斯といふやうな幾分不平も混じつてゐるのですが、極めて真面目の境遇で、一茶は飽くまで、これも人間世界のことだと純客観視し自分の事と思はずに否、自分のことに徹して了つたのが此の句の生命でありませう」。

初空へさし出す獅子の天窓かな

㊤ 七番日記(文化8・1)・我春集・浅黄空・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集・しきなみ(文化8序)

▽ 七番日記、座五「首哉」。「しきなみ」、拙著『一茶小論』(一茶新資料考)参照。

解 まっ青に晴れあがった初空へ、獅子舞がその獅子頭を突き出すようにさしあげる。新春の清新な気分が鮮明に詠まれている。

## 草庵二句

庵の春寝そべる程は霞なり

㊤ 稿本発句題叢・希杖本句集

▽ 発句鈔追加、座五「霞けり」。「草庵二句」は、撰者の書き込み。

語注 中七「寝そべるのに心地よいほどの」、の意。

解 信濃のおそい春も、今日はごろりと横になるのに心地よいほどの霞空であるよ、の意。初見は稿本発句題叢（文政3以前）であるから、さと女誕生後家庭の人として、つかのまの幸せにひたっていたころの作と見てよからう。

我春も上々吉ぞうめの花

㊤ 我春集・随斎筆記・稿本発句題叢・自筆句集・発句鈔追加

▽ 我春集、前書「着到帳第一番」。自筆句集、前書「はつ春」。七番日記（文化8・1）、中七「上々吉よ」。同（11・春）、

中七以下「上々吉よけさの空」。自筆句集、中七「上々吉よ」（別収）。

語注 「上々吉」、前出「元日や上々きちの浅黄空」の「語注」を参照されたい。

解 晴れあがった初空に梅の花。「上々吉」の新春というべきだ。

「元日や上々きち」の項でもふれたが、二六庵嗣号の後、京阪・西国などの長途行脚で、一流俳士との親交をえ、旅の記念集の上梓も成った。一茶は自信をもって江戸に帰ったが、江戸の俳壇はそれをそのまま受け入れるほど甘くはなかった。一茶は何度も自身の結社を結ぶべく働き、「月並俳諧」の興行も試みたが、結実の夢はむなく消えて、田舎まわりの生活にたよらざるをえなかったのである。文化七年十二月、一茶は起死回生の願いを込めて、守谷を拠点に下総の俳士たちの鳩合を図ろうと、西林寺に乗りこんだ。『我春集』の序文には、そうした一茶の意気込みが記されている。この句は、前年（文化7）末、そういう情況下で詠まれたのである。

▼ 中島「小林一茶集」に、「守谷西林寺で手厚いもてなしを受け、気持のよい新年を迎えたので、上々吉の上機嫌なのである」。

三崎の井は遊女柏木がかたみなりとかや

若水のよしなき人に汲れけり

㊤ 文化句帳(文化5・1)・文政版発句集

▽ 文化句帳の前書は「三崎野中の井は遊女柏木がかたみ也」。

語注 「三崎の井」「遊女柏木」、未詳。

解 遊女柏木のかたみと伝えられる野中の井の若水は、何のゆかりもない人の手によって汲れたことだよ、と解しておく。

若水やそうとつき込梅の花

㊤ 嘉永版発句集初出

解 汲み上げた、若水の上に一片の梅の花びらがどこからともなく「そう」と舞い落ちてきた、の意。中七の「そうとつき込」に、上品で軽ろやかな梅の花弁と、清廉な空気を寒じさせる。

蓬萊や唯三文の御代の松

㊤ 七番日記(文化8・1)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

語注 「蓬萊」は、「蓬萊飾り」と見るよりも、花器・花挿しの類と見た方がよからう。「蓬萊」は、もと、池の坊好みの銅製の薄端(うすばた)。その銘が、花器の名として慣用されるようになった。「唯三文」の「三文」は、「三文花」(仏前などに供える安価な切花)の「三文」と解す。

解 粗末な花挿しに、三文花の松を挿して新春を祝う、の意。一茶自身の迎春と見るよりも、その周辺の人々の迎春と見るべきであらう。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「『蓬萊』は新春、三宝台の上に串柿、野老、橙、蜜柑、勝栗、梅干、昆布、のし、穂俵、海老など

を飾つて祝儀に用ひるものである。ところが、赤貧なる我が一茶は唯三文で求めた松を以て之に代へたのだ。寒素な野人一茶の家のていたらくは正に是であった。しかも「御代の松」に無上の誇を感じてゐる一茶である」。

蓬萊に南無くと言子供哉

㊤ 我春集

▽ おらが春・稿本発句題叢・浅黄空・自筆句集・発句鈔追加、中七以下「南無く」といふ子哉。七番日記(文化8・1)、座五「童哉」。

語注 「蓬萊」、正月の床飾り。蓬萊飾。「南無く」、称名念仏の幼児語。

解 正月の床飾りに向つて、手を合わせ、「南無く」と称える幼児の姿に、「いとをしき」を感じたのである。

この句、『おらが春』では、「よりく思ひ寄せたる小兒をも遊び連(注、愛媛さと女の)にもと爰に集ぬ」(第十二話)として収めた、「柳からもくぐあゝあと出る子哉」以下十一句中の第二句。ここでは、それぞれタイプの異なる子供たち十一人の身の動きが題材になっているが、それは単に子供たちの動きを描写しただけでなく、それぞれの動きの中に、子供たちのはつらつとして、すがすがしい、本態を見ているのである。例えば、この句を挙げたのは、この幼児の姿を通して、幼にして「仏性」を得た人間を見てわが子にもその影響がほしいと望んだからにはかならない。「蓬萊飾」のことを解説するばかりでは解にはならない。

▼ 川島露石(つゆ)『一茶俳句新解』(紅玉堂書店・大15)に、「ばたく」と這ふ程の子が物珍しげに蓬萊の方へ寄つて行かうとするのを、『いけませんよ。のよさまですよ。』といふ風にたしなめると、子供も常と様子の変つた式物に何やら敬虔の念を感じて、可愛い手を合せて南無々と拝する」。

初春や千代のためしに立給ふ

㊤ 文政版発句集初出

▽ 文政版発句集、前書「富士画」に。

語注 「立給ふ」は、「富士画」の前書により、富士の画讃であったことがわかる。「ためし」は、証拠・証拠になるような

例、の意。

解 初春に、富士は悠久の自然をさし示すように、変わらぬ姿でお立ちになっている、の意。座五の擬人法が一茶らしい。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「荒木田守武の『元朝の見るものにせん富士の山』以来、俳諧に富士を正月の景物としたものは少くない。其等に伍して一茶のこの詠も存在権を十分に主張し得られると思ふ。初春の空に白銀なす雪の白衣を浄らかにも神々しくも纏うて永劫不滅の或物を黙示する莊嚴な姿は端嚴美妙な神の御姿である。一茶の感激は茲に在る。(中略) 敬虔な一茶の心の所在を、かういふ句によつて見逃したくないと思ふ」。

初春も月夜となりぬ人の皺

㊤ 嘉永版発句集書出

▽ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集・近世発句類題集、中七「月夜になるや」。文化句帳(文化2・2に重出)、中七以下「月夜となるや顔の皺」。

語注 「月夜となりぬ」、十日過ぎの月夜のころになって、の意。「人の皺」、疲労の色が顔に出たことをいう。

解 春だ、春だとうかれ遊んでいるうちに、七草、蔵開きと過ぎて、月夜のころにはすっかり遊び疲れてしまったことだ、の意。

長谷の山中に年籠して

我もけさ清僧の部なり梅の花

㊤ さらに笠(寛政10板)・浅黄空・自筆句集・俳諧寺抄録・文政版発句集

▽ さらに笠、前書「此裡に春をむかへて」。浅黄空・俳諧寺抄録、前書「山寺に春を迎へて」。自筆句集、前書「山寺に元日」。

語注 「長谷」は、大和の長谷寺である。年譜等の通説は、文政版発句集の前書に従って、寛政十年大和の長谷寺で迎春とするが、確証はない。

解 大晦日は長谷寺に参籠して、身心ともに清められて迎えた明けの春であるよ、の意。座五の「梅の花」に、そのすがすが

しい気分が象徴的に表現されている。

この句、西国行脚の記念集として編んだ『さらば笠』の巻頭に収めた歌仙(付廻し)の立句である。『さらば笠』は、京の勝田吉兵衛板。序・跋・刊記はないが、有鱗編「俳士年表」の寛政十年の項に、「さらば笠撰」の一茶自身の書込みがあることから、同年中の板行とされる。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「身も心もすがくしくなつた若い一茶の目にほのぐくと明けゆく庭の梅の色と香が、こよなく清浄なものに享け入れられたであろう。塵の世のあくたもくと取去つたこの朝、一茶は純な優婆夷となりきつたのである」。

福わらや十ばかりなる供奴

㊤ 七番日記(文化11・1)・文政版発句集

語注 「福わら」、正月庭の地面に敷く藁。「供奴」は、「奴」にこだわる必要はなく、供の役をつとめる子供と解してよからう。

解 正月四日、寺院の年始廻りでもあろうか。敷つめられた庭の福藁を踏み、緊張の面持ちで、供の少年がやって来た、の意。  
小児のあどけなさを

かま獅子臆ではらへぬ門の松

㊦ 文政版発句集初出

▽ 文政版発句集、前書なし。中七「臆ではらひぬ」。

語注 「かま獅子」は「竈獅子」か。竈獅子は、竈神の神体として、竈の上に掛る面。「竈獅子」を思わせるような人物を言ったものか。「カモシカ」(羚羊)ではなからう。前書「小児のあどけなさを」は、文政版発句集の「鳴猫に赤ン目をしててまり哉」の前書。誤ってここに記されたものである。

解 「かま獅子」のような顔をした人物の指図で、門松は片付けられた、とでも解すべきか。

袴着て芝にごろりと子の日かな

㊤ 自筆句集・文政版発句集

語注 「子の日」、正月初子（はつね）の日に、野に出て小松を引き千代を祝って宴遊する行事。子の日の遊び。小松引。『婆心録』の、「千代経べき物を様く子日して」（芭蕉）の注に、「このもかのも野に出て、千代ふべき小松を引き、或は松の樹に倚りて腰を摩し、或は菜羹に和して口に嚙り、君を寿ぎては歌を詠じ、親を祝うては詩を吟ずる人様々の初子の遊を見て、あの千年も生きる物を引上げて、めでたがる世の習こそをかしけれと酒のみのみ咄す様也」。「榎迄引抜かれたる子の日哉」（文化1）、「烏帽子きてどさり寝ころぶ子の日哉」（文化14）、「太刀佩て芝に寝ころぶ子の日哉」（文化14）。  
解 子の日の宴遊で、すっかり酔がまわり、正装のまま芝の上に「ごろり」と横になったのである。春のおだやかな陽光、それを浴びて横になっている人物のさま、それに目をやる作者の心もおだやかである。

折てさすそれも門まつにて候

㊤ 板本発句題叢（文政3板）・発句鈔追加

▽ 七番日記（文化9・1）・稿本発句題叢・希杖本句集、上七「是も門松」。

解 松の小枝を無造作に手折ったものが、家の戸口にさしてある。立派な門松を立てる人も、こうした門松を立てる人も、新春を祝い、新年に期待する気持ちに変わりはない。もちろん、一茶自身の門松ではない。

小松引人とて人のおがむなり

㊤ 八番日記（文政4・11）・自筆句集・文政版発句集

▽ 八番日記（文政4・9）、中七「人として人が」。梅塵本八番日記（文政4）、中七以下「人として人をながむかな」・「人として人のおがむなり」。

語注 「小松引人」は、「子の日の遊び」の主宰者、あるいは主賓。その千代にあやからんと「をがむ」のである。

解 子の日の遊び、一座を代表して小松を引く人物に、われもまた、その千代の寿にあやからんと手を合わせる、そんな気持で参会者が目を見張っている、というのである。

我庵やけさの年玉取に来る

㊤ 七番日記(文化11・1)・句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加・近世発句類題集  
解 手に入れたばかりの虎の子の「年玉」を、早々に取りに来られてしまった、の意。正月早々に掛取りが来るということは考えられないが、春になったら支払うと、口約束でもしていたのだろうか。

初夢に猫も不二見る寝やう哉

㊤ 文政句帳(文政7・12、8Ⅱ重出)・文政版発句集  
語注 「不二見る」、初夢は、一富士、二鷹、三茄子(なすび)という。  
解 縁さきで、春の日を浴びながらゆったりと昼寝をしているこの猫は、富士の夢でも見ているのだろうか。そんな寝ようである。

逃しなや水祝るゝ五十掙

㊤ 七番日記(文化15・2)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集  
▽ 浅黄空・自筆句集、前書「水祝」。

語注 「水祝るゝ」の「水祝」は、嫁入・婿入り、あるいは新婚最初の正月、神社参りの後などに近隣の若者たちが新郎に水をかけて祝いはやす風習があった。

解 新婚と言っても「五十掙」、かんべんしてよと「逃げしな」に、うしろからざぶっと水を浴びせられ、うれしくも照れくさい、そういう気分を詠んだ。

一茶が赤川の常田家の娘きく女と結婚したのは、一茶五十二歳の文化十一年四月であった。『七番日記』には、「四月十一日赤

川里、娶<sup>ル</sup>常田氏女、女年二十八<sup>ト</sup>云、五十二<sup>ニ</sup>始妻帯<sup>テ</sup>とある。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「この句は文政元年の五十六歳の部に出てゐるが無論一茶自身の事でなくてはならぬ。(中略)『水祝』はもと、その村に新住する者に水を手へるといふ縁喜から出たものださうである。或は月経を火と言つたところから、早くその火を止める、即妊娠するやうにとの禁厭の意味から水をかけるのだともいはれている。川島「一茶集」に、「(水祝は)享保元年に嚴禁されたが、地方には往々行われていた。五十二歳で結婚した一茶は、少なくとも、気持の上では、おもはゆさの経験の持主であった。順当ならぬ人間の運命を暗示する『五十聳』という語には、悲しいアイロニーとユーモアがある」。

大声や廿日過ての御万歳

㊤ 七番日記(文化8・1)・我春集・板本発句題叢・発句鈔追加

▽ 稿本発句題叢、中七「廿日過て」の「」。

語注 「万歳」、年の始めに風折烏帽子に素襖を付け、腰鼓を打って、祝い詞をうたつて舞い、また、太夫と才歳の二役に分かれ、才歳の駄洒落を太夫がたしなめるといふかけあいを演じて、米銭を乞い歩く旅芸人。出身地により三河万歳、尾張万歳などと呼んだ。

解 正月二十日過ぎ、時期はずれの万歳は、人の気を引くために、年始めにくらべ大きな声を張りあげている、というのである。「万歳や馬の尻へも一祝」(文化8)、「万歳や五三の桐の米袋」(文化15)。

▼ 川島『新釈』に、「『へへらへえ』と、風折烏帽子に大紋の直垂を着て門々を訪れて来る万歳も、門松に対してこそふさはしいものである。それが、正月も廿日過ぎて世の中は次第に常態に復しつゝある時、然も遊び疲れの倦怠さへ添はる沈滞した空気の中に、突柏子もなく大きな声を出して鼓を打つて来る万歳の不調和な滑稽さ」。

鳴猫に赤ン目をして手まりかな

㊤ 八番日記(文政4・1)・自筆句集、文政版発句集

▽ 文政版発句集、前書「小児のあどけなさを」。八番日記(3・6)、中七「赤ン目と云」。

解 かわらで、「ニャーン」と鳴いた猫に、「赤ン目」をして、手まりをつき続ける。ちょっとおしゃまな幼女。さと女夭折の後、亡き愛娘の成長を追う、悲しい一茶の本態を見逃がせない。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「すつかり子供の世界に引き込まれて居る。作者が、事実には直面してのありのままの、即興的の描写である」。川島「一茶集」に、縁などで一心に手まりをついているそばに、猫が寄ってきて、うるさく鳴きたてるので、まりの手をちょっとやめて、赤ン目をして見せて、又トントンつきつづけている。無心の女兒の世界。中島「小林一茶集」に、「女の子が正月の晴着を着て、無心に手まりをついているそばへ、子猫が鳴きながらすりよってくる。女の子は、ちらと猫に目をくれ、赤ン目をして見せて、また手まりをつきつづける。のどかな正月風景がある」。

### 鶴の画に

人の曳小まつは千代やさみすらん

▽ 中七「小まつ、千代や」の誤記か。八番日記(文政3・10)・梅塵本八番日記・発句鈔追加、中七「小松の千代や」。前書はともに「鶴の賛」。自筆句集、前書なし。中七「小林の千代や」。

語注 「人の曳小松」、子の日の遊び。小松引。「さみす」、みさげる・卑しめる、の意。

解 千年の寿をと、小松を引く人に対し、千年の齢を持つという鶴は、その行為をみさげているのだろうか。あのまなざしは。(われら親鸞教徒は)「俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴亀にたぐへての祝尽しも、厄払ひの口上めきてそらくしく思ふからに、から風の吹けばとぶ屠家へ、くづ屋のあるべきやうに、門松立せず煤はかず」(おらが春)と言いつつ直後の一茶である。

脇差の柄にぶらく若菜かな

㊤ 文政句帳(文政8・1、3||重出)

▽ 文政句帳(7・12)、中七「ブラ下ル」。浅黄空・自筆句集、中七「ぶら下る」。自筆句集、前書「若菜」。

解 途中の道端で摘んだ「若菜」であろう。それを「脇差の柄」に、無造作に「ぶらさげ」て行く。特に風流心のある武家と

垢爪や齋の前もはづかしき

いうほどではなからう。「ぶら／＼」と表現する「若菜」のしおれたさまに、そのけだるそうな足どりを感じ取ることが肝要。

㊤ 七番日記(文化10・1)・志多良・句稿消息・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 七番日記・志多良・句稿消息・浅黄空・前書「人日」。

語注 「垢爪」、伸びた爪に黒くたまった垢。「齋」は、七番日記・志多良などに「人日」と前書があるから正月七日、七草粥の「齋」であることがわかる。ただし、諸説はただちに「七草粥」とするが、七草粥に使う「齋」と見て、しかも一茶自身七草粥に使うためと解す理由はない。

解 今日(正月七日)、七草粥をとる日、そう思って足もとの齋に手をのばした。新鮮な齋の緑に触れようとした瞬間、自分の垢爪が目に入り、齋を引くことをためらった、と解したい。句稿消息における成美の評に、「君が平生の風流、殊によし」とある。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「七草粥に箸をつけようとして、齋の新鮮な緑と自分の垢づいた爪とを印象的に対照させて、改まった祝日におのづから改まった気分になった一茶は、ふと清浄なるものに対して己を省みた。その瞬間に生れ出た一句が、この佳句であったらう」。伊藤正雄『小林一茶集』(日本古典全書、昭28)に、「此日齋の汁に爪を浸せば邪気をはらふと称し、これを齋爪と言ふ。此句はその際の一茶の羞恥心を詠んだ特異な作品である」。川島「二茶集」に、「この日七草がゆの齋の汁に爪を浸して切れば邪気を払うという」。「齋の瑞々しさと対照されて不精たらしい垢爪の恥じられる気持。この『も』は齋に対しての意を含んでいる」。

天神参

ちいさい子の麻上下や梅の花

㊤ 八番日記(文政2・12)・文政版発句集

▽ 風間本八番日記、前書「天神祭」。梅塵本は「天神参」。

語注 「天神参」は、正月二十五日の「初天神」。「天神」(菅公)、「梅」は縁語。

解 正月二十五日、麻上下に身を包んだ幼児が、学問の神・天満宮参詣に来ている。折から梅の花が満開で、その芳香に包まれたこの幼児の心境と境涯が思われる、の意。

愛娘・さと夭折後、このような句が多い。今は亡き娘の成長を心で追うのである。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「殊に改まつた麻上下の子供には、格別にも清らかさと、度ましさとが、その愛くるしい、無邪気な子供の世界の奥に漂うてゐる。『梅の花』は季節を表し、又菅公への縁ともなるので、もしそれだけだとすれば、俳句常套のマンネリズムに墮する。そこには清浄な境内と、改まつた子供の姿と共に、ほのかに香る梅が事実咲きかけて居なければならぬ」。

梅の木や欲にや願はぬ三日の月

㊤ 文政版発句集初出

▽ 文政句帳(文政7・12)、「梅が枝や欲ニヤ希ヌ三ケの月」。同(文政8・3)、上五「梅がよや」。

解 三日月の下、梅はほのかにその香をただよわせて咲いている。それはいかにも、満ち足りて、落着いたさまである。西行の「願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月の頃」(山家集)の「もち月」の下の「桜花」を思い合わせたか。

梅折や盗みますると大声に

㊤ 文政句帳(文政7・6、8・3)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 中七「盗みますぞ」の誤記であろう。文政句帳(7・6)、中七「盗ミ「ま」すぞと」。同(8・3)以下いずれも「盗みますぞと」。

解 親しい間柄の人の家の前に来ると、梅の花が満解である。「一枝もらいますよ」と大きな声をかけて、それを手折った、の意。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「『盗みますぞ』は『貰ひますぞ』と殆ど異語同義である。よくある田園風景、その語調と共にロー

カルカラーを——特殊でない一般的ローカルカラーがよく表出してゐる。これは一茶が盗まれる庵の主としても、盗む御当人としても、或は一茶とは両方共別人の客観描写としても宜い。暉峻康隆『蕪村一茶の名句鑑賞』(興文閣・昭14)に、「垣根の外に、枝ぶりのいい梅が差し出てゐる。通りかかった人が、勿論その家の人とは顔馴染なのでせう、『盗みませう』と声をかけて一枝折つて行く。都会ではなしに、農村風景であります」。

梅の木のあるかほもせぬ山家かな

㊤ 七番日記(文化12・12の末尾に「寛政元年ヨリ文化六年迄」と注して収めた二十八句中の一句)・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加

解 ひっそりと住まう山家の軒先に、小さな梅の木が一本。その細い枝先に一つ、二つ花がついている。庭に梅を植えるほどの構えでもないし、梅花を楽しむ風流心の持主が住んでいるとも思えない、そんな山家の軒先に梅の花を見つけて、この山家の主に心を遣ったのであろう。

餅組も一ざしきなりうめの花

㊤ 中七「一ざしきあり」の誤記であろう。八番日記(文政3・6、4・1重出)・自筆句集、中七「一座敷あり」。

▽ 浅黄空、中七「一座有也」。

語注 「餅組」は男衆の「酒組」に対して言ったもの。

解 にぎやかな男衆の宴席の後、もう一座敷女衆の宴席があつて、これもなかなかのにぎわいである、の意。

鳥の音に咲うともせず藪の梅

㊤ 嘉永版発句集初出

語注 「鳥の音」は「鶯の声」。

解 鶯が折知り顔にさえずる季節になった。だが、日当たりのわるい藪の梅のつぼみはまだかたい、の意。

梅に月いやみからみはなかりけり

㊤ 八番日記(文政2・6)

▽ 上五「梅の月」の誤記であろう。風間本八番日記、「梅の月いやみ辛〔み〕は」。梅塵本八番日記、「梅の月いやみからみは」。浅黄空、「白梅ニいやみからミハ」。自筆句集、「白梅にいやみからみは」。なお、全集本八番日記(風間本)は、「辛〔み〕」とルビを付すが、梅塵本・浅黄空・自筆句集などを見ても「からみ」と読むべきであろう。

解 天上の月、地上の梅、そのとり合わせには人の世の「うらみからみ」というようなものは全くない。その高潔さが美しい、の意。

菰はげばはやあかくと梅の花

㊤ 八番日記(文政2・3)

語注 「菰はげば」、寒さの厳しい信州柏原地方では、冬季家屋のまわりを藁を束ねて包むようにする。「俳諧寺記」(文政3)に、「あやしき菰にて家の四方をくるみ廻せば、忽常闇の世界とはなれりけり」。春季、その「菰」を解けば、深夜に電燈をともしたように、陽光がさしこんで別世界となる。

解 雪囲いを解けば外はずでに春、常闇の世界から解放されたような気持ちがする。そういう解放感を詠んだ句。

団十郎

咲たりな江戸生ぬきのうめの花

㊤ 株番(文化9)

解 余寒なおさめやらぬ張りつめた空気の中に、りりしく、しかも優雅に咲き匂う白梅に「団十郎」の面影を見る、の意。

## 梅折や天窓のまるい影法師

㊤ 八番日記(文政2・12)

▽ 風問本、中七以下「天窓の丸(い)へ影ぼふし」。梅塵本、中七以下「天窓の丸(い)へ影法師」。

語注 「天窓」は「あたま」と読む。

解 清楚・優雅に咲き匂う梅の小枝に手がのびた。同時に「天窓の丸い影法師」の動くのに気付いたというのである。「花盗人は盗人に非ず」とはいえ、剃髪した僧形の者(作者自身)の行為としては不調和といえよう。この句の俳諧性はそこにある。

## 信濃言葉

## 赤いぞよあのものおれが梅の花

㊤ 七番日記(文化11・1)・句稿消息

▽ 七番日記、前書なし。句稿消息、前書「信濃こと葉」。上五「鶯が」を朱にてミセケチにして、上白に「赤いぞよ」。

解 梅の花咲く季節、一本の紅梅が目に入った。「あのもの」こそ自分が求め続けてきた新しい題材だ、の意。

## 相馬覽古

## 梅が香や平親王の御月夜

㊤ 文政版発句集初出

▽ 七番日記(文化8・1)、前書なし。上五「梅さくや」。我春集、前書「相馬京旧懐」。上五「梅さくや」。

語注 「平親王」、平将門。天慶二年(九三九)下総猿島郡に偽宮を建て「平親王」と名乗った。西林寺のある守谷は平将門の偽都の跡と言われ、籠山(こもりやま)の別称があった。

解 残寒の月夜に、梅の香がほのかに漂っている。このあたりに籠ったという平将門が賞した月も、このようなものだったか  
としのばれる、の意。

▼ 川島「一茶集」に、「野望のために果てた梟雄の夢のあとをしのんで、梅の花の冷たく香る月夜を賞したのである」。

梅さくや唐土の鳥も来ぬ先に

㊤ 句稿消息・文政版発句集

▽ 句稿消息、中七「唐土の鳥の」。

語注 「唐土の鳥も来ぬ先に」、七草囃の「ななくさなすな、唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に……」をふまえる。七種の節供  
に、前日の夜あるいは当日朝、<sup>まいた</sup> 俎の上に七種またはナズナを置き、吉方えほうに向い「七草囃」を唱えながら打ちたたいた。  
滑稽雑談に、「七草の内、第一此もの(注・ナズナ)を採て盤上に置、ちいさき枝木を以て盤上を打囃す。其詞に云、『唐  
土の鳥と日本の鳥と渡らぬさきに、七くさ齋』と云々」。玉海集に、「七草をはやし初めてや七ひやうし」(貞室)。七番日  
記(14・1)に、「七草を打つてそれから寝役かな」。

解 まあ、七草囃を聞くより前に梅の花が咲いたことだよ、の意。

月の梅「の」酔の蒟蒻のとけふも過ぬ

㊤ 志多良(文化10)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 志多良・浅黄空・自筆句集・文政版発句集、上五「月の梅の」。七番日記(文化10・2)、上五「月よ梅よ」。

語注 「酔のこんやくの」、「何んだ彼だと」の意。「酔だの蒟蒻だの」。月だ梅だ、何んだ彼のと云っているうちに、今日一  
日も終ってしまった。

解 風流顔をして、ただ時流に流されて生きる自分自身に対する自嘲の意とともに、周辺俳人に対する批判の目を見のがせな  
い。我春集に、「月花や四十九年のむだ歩き」「花の月のとちんぶんかんの浮世哉」。

▼ 川島『新解』に、「月が覗き出た。円くなつた。梅が咲いた。月が欠けた。何の彼のと、眼前のことにかゝづらつて居る

間に今日も又一日過ぎて了つたと、作者は煩しいかゝづらひを月と梅とに托して、淡い疲れの中に一脈の哀愁を訴へて居る」。黒沢『研究』に、「月に梅と云ふのです、月下の梅は実に風情あるものであります。この梅香に対して人間共は酔の蕩蕩のと云ふて何のかのと云ひつゝ今日も過ぎて了つた、何といふ馬鹿々々しいことであらう」。勝峰『名句評釈』に、「やれ月の、やれ梅の、やれ何だのかのだのと眼前の煩はしいことにかゝづらつて、又今日一日過してしまつたわいと一味の煩雑と、倦怠と、自嘲とを出さうとする効果を更によく打出して、一寸他の追従を許さぬ味が有る」。暉峻『名句の鑑賞』に、「俗な俳人共が、感動もしないくせに、春になるときまつて、やれ月が出たの、欠けたの、梅が咲いたのと、風流顔して騒ぎます。その俳人の一人であつた一茶も、自分だけはそんな下らぬ事はせぬつもりでゐながら、無意識に『月の梅の』と騒いでゐる自分を発見して、自嘲してゐるのであります。

笠ざるやうめの咲日を吉日と

㊤ 句稿消息・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 句稿消息、前書「二月七日家を出る」。浅黄空、前書「旅立廿五日」。志多良、前書「三月十五日庵を出なんとして」、中七「桜さく日を」。

解 すがすがしい陽光、清楚な梅の香、この日を吉日と定め、旅の笠を身につける、の意。

山鶯よりもめずらしく新金を齒にあてける

二歩判の初音出しけり梅の花

㊤ 八番日記（文政2・11）・文政版発句集

▽ 八番日記、前書なし

語注 「山鶯よりもめずらしく」から「二歩判」・「初音」を、（鶯の）「初音」の縁で「梅の花」に言い掛けてある。俳寺記に、「……わらぢながらいろいろにふみ込み、金は齒にあてゝ真偽をさとる」。

解 二歩判を齒に当ててみて、山鶯の初音よりもめずらしいその音に、心をときめかせる、の意。

下戸村やしんかんとしてうめの花

㊤ 七番日記(文化11・9)・句稿消息・自筆句集・文政版発句集・文化十二年三月五日付斗圍あて書簡  
解 一村こそって下戸のこの村は、酒宴の騒ぎもなく、ただ森閑として梅の香が漂うばかりだ、の意。

紅梅やうつとしければ二本まで

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加

▽ 希杖本句集、上五「紅梅を」。全集本第一巻発句篇、「『嘉永版』上五『梅が香や』」と誤る。栗生純夫『一茶新集』所収・  
発句鈔追加は中七を「うつとしがれば」と「か」に濁点。

解 梅の花は清楚・高潔の感が第一、紅葉はせいぜい二本までが限度、の意。

梅の花爰を盗めとさす月か

㊤ 梅塵本八番日記(文政2)・おらが春・文政版発句集

▽ 風間本八番日記(文政2・1)、座五「さす月よ」。

解 花のよくついた梅の小枝に月の光が当たっている。いかにも月がここを盗めよと、さし示しているかのようだ、の意。

▼ 川島『新釈』に、「さゝやかな垣などから乗出して居る梅の花に、ほんのりと月が射して居る。恰度手折るに頃合な枝ぶりであり場所柄でもある。『はゝあお月様。こゝの所を盗めとの粹か。』と、ふいとこぼれた独り笑みが其儘句になつて居る」。勝峰『評釈・一茶のおらが春』(十字屋書房・昭24)に、「折らうとすれば造作なく手の届いて、妨げる何ものもない高さも詭へ向な枝である。月が、枝一杯の花に光りを浴びせてゐるから、枝振りも高さも目測されるのである。よし来たと折つてその罪を月の誘拐にかこつけるのでない。梅盗人の連累に月を引入れようとするのでない。月を擬人視して、その照らすところ梅花を、より美化する技巧の『盗め』である」。

そら錠と人にはつげよ梅の花

- ㊤ 七番日記（文化15・1）・浅黄空・自筆句集・文政版発句集  
 ▽ 浅黄空、前書「旅立」。

解 この錠は、形ばかりのもので、開閉は自在だと来訪者には告げてくれ、梅の花よ、の意。『野ざらし紀行』の「深川や芭蕉を不二にあづけ行く」（千里）に思い合わせたか。『七番日記』（文化10）には、「おとなしく留守（あ）をしている蕪（あ）」がある。

島原

入口のあいそになびく柳かな

- ㊤ おらが春・文政版発句集

- ▽ おらが春、前書「京嶋原」。

語注 「島原」、京都の朱雀の西にあった遊廓。

解 島原の入口の柳は、客の男たちを誘い込むように「あいそ」よく春風になびいているよ、の意。

▼ 勝峰『一茶のおらが春』に、「呉越の客のいづれにも靡くのを本情と見て、其角は『傾城の賢なるは此柳かな』で、彼女らの憂き勤めをなだめてゐる。それは出口の柳の句である。今は廓の入口に替つたが、柳はむかしながらの嬌態で、百年後の嫖客を迎へ、蠱惑的な春色に哀へを見せない。かう解するのは膝栗毛七編の口絵に、柳を背景の遊女に『島原の出口にして』の前書で、其角の句を賛してあるからである。一茶は其角の句を知らないで、島原を象徴する柳だけを詠んだとすれば、誰彼となく廓へぞめき入る人たちに向つて、『ようこそ』の情を含めてそのあいそ——愛想に、枝をしなやかにくねらせつゝ、靡いて見せると云ふ単純な客観写生として、深入りをしない方がよいであらう」。川島つゆ『おらが春新解』（明治書院・昭30）に、「……入口の柳がしなやかに愛嬌を作っている、というのは、同時にくるわ者の嬌態を匂わせている」。

皮剥が腰かけ柳青みけり

㊦ 稿本発句題叢・発句鈔追加

語注 「皮剥」、けだものの皮をはいで、なめし革を作ること業とする者。

解 「皮剥の腰かけ柳」も、すっかり芽吹いて春らしい光景となったよ、の意。「皮剥の腰かけ柳」の詮索は無用であろう。「皮剥」と「柳」の取り合わせにその俳諧性を見るべきである。

螢飛夕をあてやさし柳

㊦ 稿本発句題叢

語注 「さし柳」、挿し木にした柳の小枝

解 螢が飛び交う夏の夕べを「あて」にして挿し木にしたのだろうか、この柳は、の意。

門柳天窓でわけて這入けり

㊦ 八番日記(文政2・2)

解 門口に植えてある柳は、今が盛りと茂っている。それを頭で分けるようにして、くぐり入ったよ、の意。

人事にもまれて青む柳かな

㊦ 八番日記(文政2・2)

解 春の陽光に誘われるように、人出が増してきた、その人声に鍛えられるように、通りの柳も次第に青みを増してきたことだ、の意。

犬の子のふまえて眠る柳かな<sup>(一)</sup>

④ 句稿消息・文政版発句集

▼ 七番日記(文化11・春)、中七「加<sup>(四)</sup>へて寝たる」。

解 青々と芽吹いた柳の枝が垂れさがっている。その枝の影をふまえるようにして、犬の子が無心に眠りこけているよ。『寛政三年紀行』に、「青梅に手をかけて寝る蛙哉」がある。